

《長崎県》

第60回九州音楽教育研究大会 長崎大会
第59回長崎県音楽教育研究大会佐世保大会

研究主題 「**さわやか いきいき かんどう**
いつまでも 温故創新」

本会が目指す九州音楽教育の充実と振興、及びその活動の促進に期するため、長崎大会では、指導要領改訂の趣旨を踏まえた授業のあり方や指導法等について研修を深めてきた。また、本市の貴重な音楽的文化遺産である「西海讃歌」の演奏を通して、子供たち一人一人に生涯にわたって音楽を愛好する心情と豊かな情操を育んできた。さらに、これまで学んだ知識や技能・情報を再構成し、新たな価値を創造できる人材の育成を願い、16年前の大会主題をリメイクし、「温故創新」という言葉を付け加えて、その実現に向けて取り組んできたところである。

1 主題設定の理由

平成15年に「さわやか、いきいき、かんどう、いつまでも」の大会主題を掲げ、九州音楽教育研究大会が佐世保で開催された。

さわやか＝多様な音楽に様々な人々と楽しく積極的に関わることのできる子供
いきいき＝自分の思いを、音楽を通して生き生きと表現できる子供

かんどう＝様々な人々の思いが込められた音楽に感動する子供

いつまでも＝生涯にわたって様々な音楽とかわり続けていく子供

あれから16年、再び当地で開催される九州音楽教育研究大会に向けて、教育課程改訂の趣旨を踏まえた今求められる学び方、すなわち、児童生徒が先人、先輩たちの作品に触れて音楽性を高め、生涯にわたって音楽を愛好する心情と豊かな情操を育むことができる授業のあり方や指導方法等についての研修を深めてきた。さらに、これまでの取組を踏まえた研究を行う意味を込め「温故創新」を付け

加え、学んだ知識、技能、情報を再構成し、新たな価値を創造できる人材の育成を願ったこの主題を設定した。

2 主題に基づく授業実践

今回の改訂では「何のために学ぶのか」という教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教材の改善を図ることができるよう、全ての教科等の目標及び内容を、育成を目指す資質・能力として「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に再構成している。

さらに音楽科、芸術科（音楽）では、「感性を働かせて、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見いだしたりすることができるよう、内容の改善を図る。」「音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働き、音楽文化についての理解を深める学習の充実を図る。」と改訂の基本的な考え方が示されている。

これらを踏まえ本大会では、各校種に共通する課題を「ねらいの明確化」「指導計画の工夫」「協働する場の工夫」の3つの視点に整理し、授業実践に取り組むことにした。

①ねらいの明確化

ねらいと評価を明確化することで、授業で「何を学ぶのか」を明らかにし、そのことを児童生徒に周知する。それによって学習の達成感と音楽科における学力を保証することができる。

これまでの授業研究の多くは、活動が先走る傾向にあり、何を目標とする活動なの

か、何を学ぶための活動なのか、すなわちどのような学力を獲得させるかが曖昧であった。音楽の授業に対して以前より言われている「活動あって学びなし」であり、これは大きな課題であるといえる。そこで、1時間の授業で何をできるようにするのか、何が理解できればよいのかを明確にすることで、適切な評価とそれに基づく支援ができるような授業を目指し、そのことよって、児童生徒の学びを確実なものとしたい。このような趣旨の「ねらいの明確化」は、授業づくりの基本と考える。

②指導計画の工夫

音楽科における技能は「思考力、判断力、表現力等」の育成と関わらせて習得すべき内容であるとされている。知識を得たり技能を生かしたりする活動と、思考したり判断したり表現したりする活動の有機的な関連を図ることが求められている。そのためには題材全体の指導計画を工夫することが必要である。

題材を通して児童生徒に獲得させる学力の全体像を想定した上で、個々の授業での目標を適切に設定し、教材を有効に活用したい。そして、思考、判断し、表現する場面の活動内容を明確にした指導計画を工夫することが重要であると考えます。

③協働する場の工夫

「学びに向かう力、人間性等」の育成に関しては「主体的・協働的に学習に取り組む」「対話を活性化して学びを深める」「協働的な学習を深める」等、さまざまな言葉で具体化されている。

思考力、判断力、表現力を育成するには、思考したり判断したり表現したりする活動の充実が必要であり、児童生徒が音楽表現に対する自分の考えや音楽を聴いて感じ取ったことを伝え合う場面を意図的、計画的

に設定する必要がある。他者と協働しながら学び合い、共有したり共感したりする活動を、授業の中でどのように具体化するかが課題である。さらに、思いや意図を言葉にして伝え合う対話的な学びの在り方や、音楽科の特質に応じた言語活動を可能にする指導の在り方を研究し実践する必要がある。

児童生徒が主体的に音楽と関わり、協働して音楽活動に取り組むことで、さまざまな学力を身に付け、その楽しさを味わうことができるかと考える。

3 研究の成果

視点1「ねらいの明確化」

- ・小学校では、子供たちと対話をしながら、「本時のめあて」を定めていくようにすることで自分たちのねらいを意識した活動ができるようになった。また、ねらいに戻ることで意識を高めることができた。
- ・中学校では、より深く作者の心情を理解できるよう、グループごとに、表現の工夫をする部分を焦点化した。さらに、グループごとで表現の工夫に取り組む中で、「作者はきっと～と感じていたと思うので、私たちは～を生かしながら歌います。」という相手に伝えるための【表現の言葉】を用いながら、伝えられるようになってきた。

視点2「指導計画の工夫」

- ・題材を通して、児童に「何を学ばせたいか」という具体的な学びの連続性を考え音楽づくりでの学びを鑑賞で生かしたりすることなどの関連し合う適切な指導計画を工夫することができた。
- ・2つの日本歌曲を用いて3時間ひとまとまりの学習を繰り返したことで、こ

れまで学んだ知識や技術、自分の変容を次の学びへつなげられるようになった。また、音楽室には音楽記号の読み方や使い方を掲示し、グループ活動や全体の場で、音楽に関する記号や言葉を積極的に使いながら説明できる能力を身につけられるようになってきた。

視点3 「協働する場の工夫」

- ・教師が目前の児童の状況をしっかりと把握し、学年の実態を考慮して対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりできるような発問を工夫した。考え方については、カードなどを活用し、可視化などの工夫をすることで、音楽の要素を学び、「反復」「変化」「呼びかけ」と答えがあるということを見つけることができた。
- ・各グループの意見を拡大楽譜にまとめたことで、グループ内だけでなく全体の場で共有しやすくなった。鑑賞シートには、「この曲を聴いて、～のようなイメージを持ちました。それは、（音楽の要素）が～となっていたからです。」という【鑑賞の言葉】を提示したことで、意見交換を具体的にを行うことができた。表現方法を深めるグループ練習では、評価者を決め、「今の演奏は、～の部分が（音楽を形作っている要素の働かせ方）というように歌っていたので、～という思い／情景が表現できていたと思います。」という【評価の言葉】を用いて相互評価をさせたことで、主体的・対話的な深い学びにつながられた。
- ・グループ学習での成果を発表させることで互いに学びを深め合うことができるのではという意見も出ていたが、発表に費やす時間をグループでの対話の時間に充て、言葉によるコミュニケーションの中で学びの質を深められるよう指導を続け

てきた。グループの意見は教師が「つなぐ」ことで共有を図り、授業時間の不足という課題を解決する方法として、今回の授業展開を試みる事ができた。

4 今後の課題

1日目は、これまでの授業研究の成果として各校種における公開授業と研究協議、2日目は、佐世保の全校種の子供たちによるウェルカム演奏を披露させていただいた。本会の目玉の一つであった校種を越えた幅広い交流ができるように授業会場の工夫もしたところであるが、結果的に3会場に分かれてしまったことは残念であった。

ただ、2日間にわたって参観していただいた多くの方々からは、多くのお褒めの言葉をいただき恐縮している。各分科会で得られた貴重なご意見並びに指導助言を今後の授業改善に生かしていきたい。また、数々のご教示をいただいた文部科学省の志民一成調査官様、そして、「音楽から学ぶ、大切なこと」と題して、大変楽しい講演をいただいた宮川彬良様に心から感謝申し上げる次第である。